
〈特集:千石正一 前評議員追悼集〉

自然研前史

山瀬 一裕

110-8676 東京都台東区下谷3-10-10 一般財団法人 自然環境研究センター

Showichi Sengoku's days prior to the establishment of JWRC

By Kazuhiro Yamase

Japan Wildlife Research Center, 3-10-10 Shitaya, Taito-ku Tokyo 110-8676, Japan

千石君が亡くなって既に5ヶ月が過ぎた。

何時も千石君が陣取って山のように積み上げた資料と格闘していた部屋は、きれいに片付けられぽっかりと穴が空いたようになっていた。

千石君が所属していた自然環境研究センターは今から34年前、1978年秋に日本野生生物研究センターとして産声をあげた。

ここで、彼が生涯の仕事場とした日本野生生物研究センター、後に自然環境研究センターに改名した組織の設立前史と組織の中での彼の働きぶりを紹介しておこう。

1960年代後半、世の中は公害問題や自然破壊問題で騒がしくなっていた。1972年にはストックホルムで開催された国連人間環境会議において人間環境宣言、いわゆるストックホルム宣言が採択され、「宇宙船地球号の遭難」、「成長の限界」という言葉がマスコミ界を賑わし、地球規模での環境問題に世の注目が集まりだした時期である。このストックホルム宣言の前に実施されていたのがIBP(国際生物学事業計画)で、大学の生物系研究室では今までにない予算の増加で研究活動が活性化していた。研究室単独の研究というよりは、いろいろな研究者によって研究室の枠を超え、また大学の枠を超えて研究活動が行われ

ていた。千石君が東京農工大学に入ったのもちょうどその頃だと思いが、その流れを汲んでよく東大農学部演習林の研究室に出入りしていた。千石君が自叙伝にも述べているが、東大周辺の生物系古本屋をリュックサックを背負って徘徊していた行き帰りに東大の研究室に寄っていたのだろう。その頃の研究室には東大の連中はもとより、農工大、都立大、東邦大などいろいろな大学の学生や院生がごろごろたむろしており、口角泡を飛ばして深夜まで議論していたのを思い出す。千石君もたむろの一員ではあったがそれほど目立った存在ではなく、部屋の片隅で黙々と本を読んだり資料を整理していた姿が記憶に残っている。ただ話が爬虫類や彼のツボにはまった話題になると俄然身を乗り出し彼独特の論をまくしたてていた。

彼が大学に在学していた頃はちょうど学生運動の嵐が吹き荒れていた時期と重なる。彼がどのような学生生活を送っていたか彼からもあまり聞いたことがない。ただ日高敏隆先生の薫陶を受けていたことは何回も聞かされた。多分学生たちが大学改革を巡って右往左往していたのを横目にマイペースで自分の世界を築き上げていたのではないだろうか。その頃、彼が寺山修司主宰の劇団「天井桟敷」

に所属していたのをどれくらいの人を知っているだろうか。寺山修司の物まねをやって見せたり、テレビにでていた女優の誰それは俺の同僚だなどという話を何度か聞いたことがあるが、どれかの劇の端役くらいはやっていたのかも知れない。その後、テレビの動物番組でのタレントぶりをみていると、その頃の経験が生かされたのかなと思ったりもする。

いずれにしても東大農学部研究室にたむろしている間に、教員資格を取って教員になっていった者や民間会社に就職していった者が去り、残った者たちが何か自然の調査や研究を行う組織を自分たちで作ろうかという話が持ち上がってきた。もちろん千石君はそれら居残り組の一人であった。いざそのような話になると、居残り組は梁山泊に集う山賊集団のようなもの、あらゆるツテをたぐり寄せて突き進んでいった。後ろ盾になってくれたのは当時の東大農学部演習林研究部の高杉欣一先生、京大霊長類研究所所長近藤四郎先生、東大農学部林学科の佐藤大七郎先生、植物分類学の大御所倉田悟先生、生態学会会長をされた大島康行先生、東北大学学長をされた加藤陸奥雄先生など、政財界では大石武一さん、加藤しずえさん、三木武夫さん、当時の経団連事務総長の花村仁八郎さん、後に経済企画庁長官をされた大来佐武郎さん、松下幸之助さんたち、今から思うとよくこれだけの人たちを口説き落としたものだなと感心したりもする。研究組織を作りたいということで文部省にアプローチをかけたりもした。当時の文部省大学学術局の筆頭課長だったと思うが後に文部大臣までなった遠山敦子さんを紹介してもらい、会いに行ったりもした。遠山さんには虎ノ門の「赤とんぼ」というレストランでカレーをおごってもらいながらいろいろアドバイスをいただいたのを覚えている。環境庁自然保護局の鳥獣保護課に相談に行ったときは、課長から「うちの課は鳥と獣しか扱わないので爬虫類や昆虫類は管轄外だ」と

冷たくあしらわれたりもした。それでも話が持ち上がって3年ほどで環境庁自然保護局企画調整課を主管課として財団法人認可まで持ち込めた。この間、役所の交渉事や会社回りをしているの寄付集めなどの活動に千石君は積極的に参加していない。本人もそのようなことには関心がなかったのか、出て行けば彼の風体では話をぶち壊すことになるのを自覚していたことだったと思う。黙々と私たちが要求する資料を研究室の片隅で作成してくれていた。ただこの集団には千石君のような変わり者が沢山いて面白そうだという評価はされていて、そのことがプラスに作用したのは確かのようにだ。

財団設立は昭和53年(1978年)10月、銀行が紹介してくれた4階建ての小さなビルを事務所にしたが、仕事が無い中、毎月家賃が30万円、一日1万円ずつ金が掛かっている重圧感は大いのものであった。腕に自信のあるものは百円玉を握り締め近くのパチンコ屋に行き一日中パチンコで文房具稼ぎ、他のものは出版社の校正作業をしたりして事務所維持費を捻出していた。その内、千石君の発案でだったか本屋をやるということになった。当時、生物関係図書の通信販売を行っていた東京通販(TTS)の前波さんから昆虫以外の生物関係書籍を回してもらいスタートした。これは千石君のはまり役、それ以降平成元年に本郷を引き払って入谷のビルに移るまで20数年間、自然研の事業の一つの柱として大きな役割を果たした。千石君はIBMのヘッドがボール型のタイプライターをパチパチ打ちながら図書目録を作成したり、仕入れ伝票を作成したりしていた。パソコンが普及してからもこのIBMでの作業は変わらなかった。単に本屋をやるということだけでなく、世界中の面白そうな本を漁り、本が届くと一通り本に目を通し本棚に収めていく、お客さんから相談を受けると的確に希望の本を売りつけるという千石君ならではの世界ができあがっ

ていった。それだけでなく、本屋のスペースを利用して毎週爬虫・両生類情報交換会を開いていた。本屋の作業をしながらいろいろな人と情報交換する不思議な空間、千石ワールドが出来上がっていった。ここに集まる人たちは後に大学教授や国立研究所の幹部になる当時の若手研究者だけでなく、警察官、自衛官、俳優、音楽家など実に多彩な人々であった。午後出勤、夜中に退社という勤務形態は環境庁でも有名で、彼に用事があるときは夕方方に電話をするというのが通例になっていた。

ある時、ひょっこり台本を持った人が本屋を訪ねてきた。映画監督の今村昌平であった。

彼が書いた「楢山節考」の台本の生物考証をしてほしいという依頼であった。千石君が台本にみっちり赤を入れ、登場するマムシやウサギなどの手配もしてあげた。完成間近になってプロデューサーが訪ねてきてお礼の予算が無くなったという。劇場の招待券で我慢してほしいということでケリ。今、そのビデオを見ると最後に「協力 日本野生生物研究センター」というテロップをみることが出来る。

黎明期が過ぎ、段々組織の体裁が整ってくと千石君の役回りは自ずと定まっていた。

組織の知恵袋と皆の相談相手という役回りである。千石君の取り得は何と言ってもその膨大な知識量である。何も訊かなければ至って不親切な男であるが、少しでも質問すれば圧倒的な量の答えが返ってくる。OS機能はあまりなかったが、辞書機能は抜群の男であった。また、古本屋の親爺然と部屋の片隅で夜中まで黙々と仕事をやっていれば、皆も相談しやすかったのであろう。若手研究員の仕事上の悩みや人間関係の相談などをよく受けていた。

自然研を取り巻く状況は設立当初と随分変わってきたが、今も設立時と変わらず安い給料ながら人のため世のためにがんばっているという気構えだけは持ち続けている。千石君のような情熱があり、少々世の中からはみ出した若者が活躍できる場を提供し続けて行くのも、この組織の一つの大きな役割なのだろうと思ったりもしている。

千石君の冥福を祈ります。